

ブント・その経験の二断面Ⅶ

羽山 太郎

A 総括の立場

私にとって「総括」とは、自己検証の意味をもつ、このことに気づかされたのは、『プロレタリア通信』66号(4月15日)発行直後、経済産業省前テントで「アレは遺言か」と。また、その後幾人かから電話で「自己批判文章だな……。」と。さらに「……だから言っただろう……」

意味がある。

私にとつて「総括」とは、『日本農業の復権』(2013年・豊島文化社刊)の、あとがきえにかえて「私の思想の変せんについて」なる一文をのせた。私は、1980年9月アイヌと出会うまで大きくその思想(行動様式)を変えた。つい最近も『日本農業の復権』を読んだ旧友から「オマエ、前(1960年代)に言っていたこととずいぶん違うじゃないか」とナジラれた。

さて、私は『日本農業の復権』(2013年・豊島文化社刊)の、あとがきえにかえて「私の思想の変せんについて」なる一文をのせた。私は、1980年9月アイヌと出会うまで大きくその思想(行動様式)を変えた。つい最近も『日本農業の復権』を読んだ旧友から「オマエ、前(1960年代)に言っていたこととずいぶん違うじゃないか」とナジラれた。

この30数年間多少の「宇宙曲折」はあったにせよ基本的には以下に示す団体に所属(略)したり、または支援者の位置に止まり得てきた。この数年私のほかに、「左翼」とは「左翼の影響力とは」「左翼の刷新」「左翼の再生」などなど、多くの著名人や指導的立場の人々によって主張されてきた。とりわけ1989年ソビエト連邦の崩壊後心ある人々は主体の再構築にむけて苦闘している。

この「総括」は、「ブント」その経験の「二断面」として、時間・場所を知りうるかぎりで公表した。何時、何処で誰れが、何をしたか。これは、私の立場である。私は私の立場の再確認を含めて、経過を「総括」としている。私は、この60年に近い年月、常に何かを人々に呼びかけてきた。呼びかける主体とは何か。呼びかける主体とは「なにものなのか」自問自答すること、これこそが私にとつての「総括」なのである。ここに自己検証だとする

この30数年間多少の「宇宙曲折」はあったにせよ基本的には以下に示す団体に所属(略)したり、または支援者の位置に止まり得てきた。この数年私のほかに、「左翼」とは「左翼の影響力とは」「左翼の刷新」「左翼の再生」などなど、多くの著名人や指導的立場の人々によって主張されてきた。とりわけ1989年ソビエト連邦の崩壊後心ある人々は主体の再構築にむけて苦闘している。

この2点において、私も旭凡太郎こと、藤本昌昭君を名指しすることとしたのである。藤本君を名指しする時期が今日となったのは、「共産主義者同盟神奈川県委員会左派」との合流・合併・統合が確実に破産したこと、次いで、我々は、同盟第3回総会(2016年1月)を実施したこと。これらを踏まえて、路線的対立と理論(哲学)とは何かを明瞭にすることとした。

つまり、検証のうえに、決意も覚悟も、したがって、私、個人の責任においてで諦念の上に記録にとどめることとしたのである。

この1995年は、我々の国際先住民年活動、PKO法粉砕斗争、湾岸戦争反対運動を展開してきたことに踏まえ、阪神淡路大震災、WTO反対、農民連合結成、「フォーラム90年」など、とりわけ、9月には沖縄で北軍兵による少女暴行事件が発生した。とにかく忙しい毎日であった。しかし、そうした中で一面の主張欄で私は、「新左翼・ブントの再建を！ 社会党には引導を！」を見出しとして、1. 労働者・市民・農民の主体制、2. 新左翼の大連合を、3. 新たなうねり、とする政治主張である。

「別掲高見沢氏の赤報派内論争にかんする寄稿文(先日発行された赤報派共産主義21号にたいするものとしての)を契機に、これへの意見交換ならびに討論を、相模、佐藤(秋)、佐藤(保)、高見沢、旭でおこなった。」と。(別項で批判)

私、個人の責任においてで諦念の上に記録にとどめることとしたのである。

「環境／人権／平和ネットワークのメンバーの1人として昨年8月7日の『百姓と手を結び、地域と世界を変えろ』フォーラムを前後して、日本の農業問題をずっと勉強してはいますが、以下は農業問題の初心者として最近私が学習した何冊かの本のノートのようなものにすぎません。」と、

旭までが「なにかわからぬ始はあつても終りの」がない。普通は「」でカギカッコと言う。だから、文字づらをひろつておくと、

この1995年は、我々の国際先住民年活動、PKO法粉砕斗争、湾岸戦争反対運動を展開してきたことに踏まえ、阪神淡路大震災、WTO反対、農民連合結成、「フォーラム90年」など、とりわけ、9月には沖縄で北軍兵による少女暴行事件が発生した。とにかく忙しい毎日であった。しかし、そうした中で一面の主張欄で私は、「新左翼・ブントの再建を！ 社会党には引導を！」を見出しとして、1. 労働者・市民・農民の主体制、2. 新左翼の大連合を、3. 新たなうねり、とする政治主張である。

「環境／人権／平和ネットワークのメンバーの1人として昨年8月7日の『百姓と手を結び、地域と世界を変えろ』フォーラムを前後して、日本の農業問題をずっと勉強してはいますが、以下は農業問題の初心者として最近私が学習した何冊かの本のノートのようなものにすぎません。」と、

旭君自身が一貫して問われているのだ。君、藤本君は何か、何処で、どうしていたのか。していないかったのか。とまれ、『プロ通』29号、旭論文にそつて、(6回大会、マル戦派との党内闘争について)

この2点において、私も旭凡太郎こと、藤本昌昭君を名指しすることとしたのである。藤本君を名指しする時期が今日となったのは、「共産主義者同盟神奈川県委員会左派」との合流・合併・統合が確実に破産したこと、次いで、我々は、同盟第3回総会(2016年1月)を実施したこと。これらを踏まえて、路線的対立と理論(哲学)とは何かを明瞭にすることとした。

「環境／人権／平和ネットワークのメンバーの1人として昨年8月7日の『百姓と手を結び、地域と世界を変えろ』フォーラムを前後して、日本の農業問題をずっと勉強してはいますが、以下は農業問題の初心者として最近私が学習した何冊かの本のノートのようなものにすぎません。」と、

旭君自身が一貫して問われているのだ。君、藤本君は何か、何処で、どうしていたのか。していないかったのか。とまれ、『プロ通』29号、旭論文にそつて、(6回大会、マル戦派との党内闘争について)

「環境／人権／平和ネットワークのメンバーの1人として昨年8月7日の『百姓と手を結び、地域と世界を変えろ』フォーラムを前後して、日本の農業問題をずっと勉強してはいますが、以下は農業問題の初心者として最近私が学習した何冊かの本のノートのようなものにすぎません。」と、

旭君自身が一貫して問われているのだ。君、藤本君は何か、何処で、どうしていたのか。していないかったのか。とまれ、『プロ通』29号、旭論文にそつて、(6回大会、マル戦派との党内闘争について)

旭君自身が一貫して問われているのだ。君、藤本君は何か、何処で、どうしていたのか。していないかったのか。とまれ、『プロ通』29号、旭論文にそつて、(6回大会、マル戦派との党内闘争について)

「環境／人権／平和ネットワークのメンバーの1人として昨年8月7日の『百姓と手を結び、地域と世界を変えろ』フォーラムを前後して、日本の農業問題をずっと勉強してはいますが、以下は農業問題の初心者として最近私が学習した何冊かの本のノートのようなものにすぎません。」と、

旭君自身が一貫して問われているのだ。君、藤本君は何か、何処で、どうしていたのか。していないかったのか。とまれ、『プロ通』29号、旭論文にそつて、(6回大会、マル戦派との党内闘争について)

旭君自身が一貫して問われているのだ。君、藤本君は何か、何処で、どうしていたのか。していないかったのか。とまれ、『プロ通』29号、旭論文にそつて、(6回大会、マル戦派との党内闘争について)

「環境／人権／平和ネットワークのメンバーの1人として昨年8月7日の『百姓と手を結び、地域と世界を変えろ』フォーラムを前後して、日本の農業問題をずっと勉強してはいますが、以下は農業問題の初心者として最近私が学習した何冊かの本のノートのようなものにすぎません。」と、

旭君自身が一貫して問われているのだ。君、藤本君は何か、何処で、どうしていたのか。していないかったのか。とまれ、『プロ通』29号、旭論文にそつて、(6回大会、マル戦派との党内闘争について)

旭君自身が一貫して問われているのだ。君、藤本君は何か、何処で、どうしていたのか。していないかったのか。とまれ、『プロ通』29号、旭論文にそつて、(6回大会、マル戦派との党内闘争について)

戦に聞いてみないとわからないからならぬ」(『プロレタリア通信』29号)とは。開いた口が閉らな

いとはこのこと。旭凡太郎の健忘症にはアキれる。否、意識的に無責任をきめこんでいるのか。旭こと藤本昌昭君の無責任、ここに極めり!と

言うところだ。全く同じ年12月に8回大会はなぜ開催されたのか。

こうした自問は一切ない。反省は一切ない。進歩などあろうはずもない。

(イ) 7回大会、1968年とは、どんな年だったのか。

①2月社会党本部会館・社会文化会館会議室から望月彰を拉致・監禁事件

岩田弘自宅破壊、岩田弘へ危害を加える

②3月ブント7回大会、大会2日目、書記長水沢史郎を始め旧マルクス主義戦線派欠席・分裂

③4・28斗争不発……全学連分裂の年となる。(3派統合・連合の全学連大会の不発・3つの全学連並立)

④8・3国際反戦集会・中央大学学生会館他を会場として3日間

⑤10・21霞ヶ関占拠から防衛庁軍事外交路線粉砕斗争へ

⑥12月ブント第8回大会

(ロ) 7回大会直前共産主義者同盟・ブント内に暴力を持ち込んだのは誰か。

さて、私が何に故に、東京地区反戦世話人(社会文化会館・高見圭司主宰)に出席することにしたか。それは、太田地区反戦青年委員会は、従来の太田行動委員会(太田区役所、太田区清掃、太田区水道)の人々、片山さとし

先生の勉強会に参加している人々、蒲田郵便局で働く人々、さらに前中製作所で労働争議の人々や東邦医科大学の人々(自治会とは別活動からインタンや地域で活動を始めた人々)、糶谷地区の金属加工会社の労働者たち、

とくに、この糶谷地区街工場労働者たちは、中央労働学院出身の人々で、いわゆる赤旗銀座の中心的な労働者たちである。

私は、加藤(ひろみ、まさみ)両氏(区職労)や青木(清掃)さん。そして、野島三郎(中核派専従)、ときには港区の中核派専従の吉岡(慶応大卒)さんなどとも

じつは太田地区反戦会議を主宰していた。しかし、この太田地区反戦は、1968年の10月8日の羽田斗争の総括をめぐって対立が激化した。

10月7日夜、つまり、

10・8未明法政大学内で大規模な中核派による学生に対する暴行事件が発生した。いわゆる大規模な「内ゲバ」の発生である。中核派による暴力・暴行は、中核派学生の羽田到着を大幅に遅れさせた。それ故に、中核派は、学生を反戦青年委員会の隊列になだれこませた。こうして、遅れに遅れて「戦場」・羽田現地に到達した中核派学生は、山崎博明君の犠牲をみるまになつたのである。

このような私の見解と野島三郎の見解は真向から対立した。この対立は、佐藤秋雄名指しで『前進』紙上で批難された。『前進』バックメン

バー・縮冊版をみよ)私はこうして、「10・8羽田斗争」の総括を独自に持っていたことも含めて、自らの意志で東京反戦世話人会(社会文化会館・社会党青少年局長・高見圭司主宰)に出席した。

佐々木、さらぎ、杉田、垂水俊介や吉森氏や大野氏の指示をうけたわけではない。しかし、いろいろな関係者、身近な人への了解(ねまわし)は当然のごとくである。

私は断じて、望月彰のブント系地区反戦青年委員会の代表の地位を奪うという「政治」としての行為ではない。あくまでも南部地区、太田地区反戦青年委員会の現状に

ながみでの行動である。このことは、望月彰(物故)をはじめ、望月彰と志ざしを同じくし望月彰を友人とし師とおぐ人々に対して、はつきりと申し述べておく。

望月彰・拉致・監禁・暴行事件は、私の意に反している。まして、第二次ブント(1966年9月第6回大会)の非マルクス主義戦線系の内部、とくに私の関わる人々の間で、人間が人間をナグッても良しとするような指示を出したのは1人もいない。

望月彰を拉致・監禁・暴行した人格とグループと第7回大会第1日目に暴力的にマルクス主義戦線系の人々を排除したグループは同一と考えて良い。

非理論主義・非科学主義的傾向の人々である。そして、7回大会を成功とする人々である。大分裂を正当化する人々である。

ここに「第7回大会をもって第二次ブントと言う」(旭凡太郎、大谷美芳、「第7回大会で関西は主導権をとった」これらは同一の精神構造にあると見て良いであろう。

繰り返すが、私の素行は素暴ではある。だからと言って、頭と口先まではかなわな

いから闇撃ちをする。宣戦布告なしにウシロから不意撃ち

をクラウス。このようなヒキョウな人間ではない。

望月彰はブント系地区反戦を代表する東京地区反戦世話人である。私は、太田地区反戦の事情の下での現場に責任をもつ一かしの世話人である。

私はこれまで誰れかにとつて換わろうなどとはただの一度も考えたことはない。たとえば『鉄の戦線』―『蜂起』の時代にあつてさえ、誰れかに替わる必要などそもそも、その当初より必要ないのだ。

『鉄の戦線』も『蜂起』もその命名からして、何かに、誰れかに遠慮してつけられたわけではない。さかのぼって、1967年10月8日斗争後、共産主義者同盟南部地区委員会の機関誌『赤軍』なる命名も誰れかの指示によるものではない。それ故、ブント書記長の水沢史郎に「軍事機密主義」とシカラレタ。松本礼二には「この本ぐらいいは読め!」とクラウンビッツの『戦争論』黄ばんで、ボロボロ(敗戦直後の出版物)の単行本を渡された。こうして、『戦争論』はもとよりトロツキーの軍事論や石原完爾に関心をもった。

この1967年の10月8日―1968年1月エンタープライズ寄港阻止法斗争の2ヶ月間人々との出会いにお

いて、現場が過激化してゆくことにおいてまたまた、垂水俊介がたずねてきては、住所と名前のメモをおいて、「サルベージ」を懇願することしばしばである。この2ヶ月の刺激こそは、私の人生を変えた。

実力斗争の飛躍こそこの「10・8斗争」であつたと私は把えている。私の労働者魂しいは、「トビ越え」たのである。この「トビ越え」は1980年9月アイヌと出会うまでつづいた。

(ハ) P通29号批判 旭凡太郎の口グセ

1. オレは、一貫して指導者であつた。

④ 「加盟書を書いたことではない」、「会費・同盟費を払ったことはない」指導者であつたからと、1980年代の弁である。

⑤ 『シニア左翼とは何か』2016年3月、「田宮を、森を、組織した」と発言、この出版物は朝日新書として市販の出版物となつている。

2. 第2次ブントとは、1968年3月の第7回大会からである。と、これも1980年代の弁

関西ブントが主流派となつたから、(最近、大谷美芳の手による文書では文章として名言されている)。

④主流派とは、議長佐野茂樹、学対部長〇〇〇〇となつたから?? 旧『黎明』・マルクス主義戦線を暴力的に開放した結果。

3. 「趣意書を認めたらう!」2010年9月、誰一人、只の1人も賛同者はおろか支持者もない。会議の席上でこのこと賛同者も支持者もないことを2010年9月以降旭凡太郎は自ら確認することとなる。

『プロレタリア通信』29号、旭凡太郎論文、冒頭、リードで、なに故にか、佐藤秋雄と佐藤保は実名で名指しされる。

当時私は、旭凡太郎論文に関心はなく無視してきたと言つて良い。しかし、2010年9月「お前も趣意書を認めたらう」には驚愕した。そして、『プロ通』29号の佐藤秋雄と佐藤保の実名文言は、極めて政治的意味をもつ文言、言語であつたと。遅ればせながら気づかされた。

ならば、私も、2010年9月以降旭凡太郎こと藤本昌昭を名指し、政治的に対応させていたこととした。寛大さや寛容は地獄への道ですよ! と改めて旭凡太郎こと藤本昌昭におそわつたというのである。

「捕まったら終わりだ!」「捕

虜になつたら終わりだ!」と逃げまどう主義者は、1960年代後半から1970年代を通じて「獄中者組合」「獄中者訴訟の会」などの団結と活動を知らない人々の口グセだ。1960年代後半から1970年代を通じて、代用監獄(所轄警察署留置場)と東京拘置所(巣鴨プリズン)と全国にある刑務所の被疑者、受刑者の処遇は、著しく改善されたのだ! 人々の在る所何処でも団結・連帯し敵とたたかうことはできるのである。人々を信じるからこそ自らをも信じたたかうことができるのだ!!

この真理を知らない者こそは、インチキゲツチャー面した指導者である。「私は指導者だ」「私は〇〇を組織した」と! こうして、「佐藤秋雄」をも屈服させたとするのが『プロレタリア通信』29号の政治的意味であろう。

「12・18ブント」など、私にとつても、佐藤保にとつてもあまり興味のないことである。「12・18」とは下赤塚交番ぐらゐは思い出すかもしれないが。

また、私個人は、当時すでに「12・18ブント」に対して結論を持つていた。即ち、すでに、ブント・南部地区委員会は『ヴィボルグ』をもち、『鉄の戦線』を

発行し、事務所を構えていた。そのような意味において「12・18ブント」に何らの興味をも持ち合せていなかった。

「シニア左翼とは何か」―反安保法制・原発運動で出現! 小林哲夫著 朝日新書(2016・3・30発行日)

「旭凡太郎。1942年生まれ73歳。…旭は大学で後輩の田宮高鷹、森恒夫を組織に勧誘する」と。

(一) 1995年とは、どんな年であつたか(『プロ通』29号発行年)

- 1. 阪神淡路大震災
2. WTO-1月発効
3. 前年より農民連合全国各地域・各県で結成合つぐ
4. 農民連合・東京-2月八王子市旧柚木村寺芝会館にて結成大会
5. 前年よりつづく各ブロック、県での農民連合結成大会に、田中正治、坂井與直、川口進ともども手分して参加
6. 7月「泥つき百姓を国会へ!」を合言葉に参議院議員選挙(農民連合・東京は不参加)
7. 9月沖縄・北米軍人による少女暴行事件発生
8. 「フォーラム90年」各イベント開催(私は事務局の一担を荷なう)

P 通29号での共産主義者同盟第7回大会での第2日目に旧マルクス主義戦線派系の人々が欠席したことについて、「マル戦に聞いてみないとわからない」と。

ナントゴウマンな、ナント忘れっぽいことか、ナント無知をさらけ出していることか。旭凡太郎こと藤本昌昭とはかように無責任男である。

旭凡太郎は、社会文化会館にての望月彰拉致・監禁暴行事件に参加していた、と最近発言している。社会文化会館の玄関口まで行つていふこと、つまり、レポ役・見張役をやつていたことを自ら発言している。にもかかわらず「オレは一貫して指導者であつた」と。

第7回大会初日、第1日目から書記長たる水沢史郎を壇上から引ずり下し、発言をふうじ込んだのは誰れか。大会第1日目に暴力を指示したのは誰れか。レポをやつていふよ

うな人間でないことは確かである。自発的にレポをやつたのか。レポをヤレと指示されたのか。大谷美芳文章によれば、「マル戦に論理ではかなわな

い」と思つていたと書いていふこと。頭や口先きでは足りないから手足を出したと。大

谷美芳はいわずもがなに語つているわけだ。わが、旭凡太郎こと藤本君はどうか。レポをやるぐらいだから同類であろう。

補章A 『ブント・新左翼NET』(仮称)の趣意と論点 2016年3月大谷美芳・元赤軍派

(イ) 年表から重要事項がそれぞれ欠落 この文章は8月1日友人より入手。 8月1日は、塩川喜信(7月30日永眠)の寝顔を一目とご家族の特別なはからいにより、蔵田計成・松田健二と3名で八王子市のご自宅を訪

問。その帰りに、旧友にいただいた。 旧友とは、『プロ通』66号を巡つて、または、19967・8年当時の時代考証をめぐつて討論した。その帰りに先きの文章をいただいた。このいただいた大論文こそ表題の文章である。

大谷美芳なる名前を気にか

2. マルクス主義だ、レーニン主義だと乱暴に「呼称」されているな。ずいぶん昔のアジテーションを思い出す。「われわれは……」「我々は……」と連呼(乱呼)するのを。中味、内容ではなく繰り返してである。

3. これも、何処ぞで、何時ぞや聞いたな、「資本主義批判」「資本主義批判」と。内容に、全くナンダカナー! というのが素直な感想だ。

4. 日本共産党との対立、革命的共産主義者同盟・中核派との競争が、吾がブント、特に第二次ブントを規定したと。もし、「競争・対抗」というのであれば革共同3派が正確ではないかと思うが。あるいは革労協を含めると4派がより正確では。

5. 武装斗争と武装斗争の位置づけ、その敗北過程は元赤軍派としてこれで良ろしいのでしようか。 6. 私がぎいと読んだ感想では反省のない総括には進歩はないな」と言うことである。

7. 「プロ独」社会主義「一党独裁」と、この政治内容「理論においても、今日の研究水準から退化している。」 8. 農業・農民問題について まるで無知。「衣食住」について無知と言うことは、社

会とは何か？ 社会の社の字も理解していないことに等しい。これこそが、インチキゲッチャーのインチキの所以である。三里塚農民の「三」の字もなし。

したがって、自由貿易の何んたるかも、WTOも、TPPも一切、その単語としてすらなし。「世界革命」から「一国社会主義へ」が大谷美芳の主張らしいが、これこそナンダカナー！

『革命の革命』守田典彦著や『日本農業の復権』ぐらいは一読して欲しいものだ。

農民が出てこないということは労働者さえでてこようがない。人間の顔がまるでない。

※いづれにしろ、400字詰用紙80枚になるうかとする大評論集・文章である。一つ今日の大谷美芳氏・元赤軍派氏の政治的（評論屋）立場を表明していることは確かである。

(ロ) 大谷美芳流「マルクス・レーニン主義」

いまどき「マルクス・レーニン主義」を！と呪文のごとく唱えれば良いというものではない。これこそが宗教・アヘンだ！ それとも今流行の覚せい剤中毒か！ 中味、内容体系を自ら提示せ

よ！ 一昨日の「マルクス・レーニン主義」はウソで、昨日の「マルクス・レーニン主義」は誤りで、今日の「マルクス・レーニン主義」を。

スターリンは、自らをマルクス・レーニン主義と自称し、ボウ大な著作をものにした。そして、ロシア社会民主党の非法部門を一貫して亡命もせず担ったのはスターリンである。

あの日和見の典型とも言うべきレーニンは生涯スターリンに頭が上らなかつたのである。

つまり、私は、××君のマルクス・レーニン主義、△△君のマルクス・レーニン主義、はたまた、宮本憲治や寛田寛一のマルクス主義などクソクライだ！ということがある。

呪文かスローガンのごとき、××君△△君の「マルクス・レーニン主義」など、唾棄すべきもの以上ではない。大谷美芳言うところの「マルクス・レーニン主義」も同じだ。

大谷美芳批判 憧れと「古証文」

10年前の古証文ではなく、150年も昔の証文を持ち出してきている。

岩田弘のコミュニケーション論の1ページぐらいい読んでから書いた方が恥をかかなくてすむ

というものだ。150年前や100前をアナロジーしてどうする。

自分の眼で、自分の手と足で頭で感じ考える！ 他人（マルクス・レーニン）の真似をしてどうするのだ。

この程度の「革命」よりは青山晴江の詩や武藤類子のメッセージがよほど革命性をもつて人々に訴える。なぜ、このようにバトウする文章を書き書いたか。

何一つ反省がなく、むしろ、自己の失敗や敗北を自慢していることに対する憤りである。

それは、7回大会をどう総括するか、その1点につきるのだ。

分裂を是とするなら党など語る資格そのものがないと知るべきだ。

大谷美芳・元赤軍派は分裂を肯定・分裂を現にいまつづけているのに全く気づかないおめでたい老人である。7回大会分裂を肯定し、「7・6分裂」を肯定し、現に、いま、この文章において私と非妥協的となった。

分裂に分裂を肯定し、それで「党」。

それで「マルクス・レーニン主義」全く理解不能・説得力まるでなし。たんなる分裂主義者のたわごとにすぎない。

一向健『赤軍始末記』、旭凡太郎『プロレタリア通信』29号、そして、この「ブント・新左翼NET」は、同じ文言をもつて7回大会分裂を肯定している。

「7回大会2日目出席しなかつたのは、マル戦に聞いてみなければわからない」、旭凡太郎の文章と大谷美芳・元赤軍派の論文内容の水準は全く同じレベルである。

一向健・旭凡太郎・大谷美芳は「7大会」「7・6」の把え方が一緒というだけでなく、一知半解な紙の上での「資本主義批判」を展開している。塩田庄兵衛（労働組合入門）ほどの内容展開なしに言語の独り歩きとして使用している。

このように書くともたまたま口先で負けたからと手足が出てくるであろうか。あるいは棒か。石か。

どこまでも恥のうわめりをつづける他はないであろう。ブント7回大会を大分裂「党建設の敗北」と把えられない小ブル主義者。これこそ小ブル急進主義という。

(ハ) 古色蒼然

小ブル急進主義による小ブル急進主義なる自己否定

1976・7年「赫旗」の紙面ににぎわした。この執筆陣はいづれも元赤軍派であつた。

「小ブルジョワ」

なんだから！ と。私にはうらやましいかぎりだ。無反省に、かような言辞を……。それですむのか。

小ブル、プチブル、大ブル、なんだかなー！ その反対語は何んですか。先ず言語学的に説明して下さい。言語学から社会科学の言語の説明をせよ。「小ブルとは」「急進主義」とは。

非科学主義

何10回何百回も繰り返す、非科学主義、反理論主義したがって、脳みそ（頭）で負けるから、手足で物を言う。手足で足りずに棒や石ころを持ち出す。

これが。

1967年2月7日、佐藤秋雄を拉致し東大駒場寮社研究室に監禁した。

1968年2月望月彰を社文文化会館会議室で東京地区反戦青年委員会の会議の席上から拉致し中央大学学生会館に監禁し暴行を加えたのは誰れか。（つい最近旭凡太郎は、レポ役か、社会文化会館まで行っていたことを告白）

1968年2月岩田弘自宅を破壊し、岩田弘自身に暴行を加えたのは誰れか。

1968年3月共産主義者同盟・ブント第7回大会第1

日目水沢史郎・書記長の発言中、壇上にかけて上り水沢史郎に暴行を加えたのは誰れか。

1968年10・21斗争で霞ヶ関占方方針を突然六本木は防衛庁の攻撃斗争に方針転換させ「ビンの投テキ」「ビンの投テキ」と無責任にさげんだのは誰れか。1968年10・21防衛庁斗争の頂点は一体何なのか夜なのか。一体どんな部隊が主力だったのか。

なぜ、佐々木和夫と羽山太郎は求令状・事後逮捕となつたのか。佐々木と羽山は何処で何時頃の斗争で「求令状」請求となつたのか。

「10・21防衛庁斗争」を厳格にその時系列、その部隊と何処で誰れが何を行ったのか総括せよ！ アホ！

「ビンビン」とわいた御人は、10・21当日何処で何をやっていったのか。「主導した」「指導した」というのであれば、当の昔に時効である。ツマビラかに自慢話してもして欲しい。

なぜ、「7回大会を主導し主流派」であつた大谷美芳君達・たちは、12月共産主義者同盟・ブントの第8回大会を組織しなければならなかつたのか。『赤軍派始末記』は不平不満のみ、ビンを投げるか、占拠するか、デモをするか、占拠するか、程度のこと。哲学・理論のカケラもない。し

かもこのような非科学主義を「小ブル急進主義」「赤軍始末記」で片づける。たしかに、この「小ブル急進主義」と片づけたのを40年前『赫旗』紙上でしばしば目にした。こうして『赫旗』は自己規定を「現代左翼」と称した。

ついでに、この「小ブル急進主義」に対をなす言語として「現代左翼」なる言語・文

言が良く使われていた。この『赫旗』紙上で目にした文

言が、まさか大谷美芳・元赤軍派の文言であったとは思わ

ない。しかし、あまりにも似てはいないか。物事を二分

法、二項対立的に整理する頭脳明晰なこの文章は、かつ

て『理論戦線』(1968年)誌上でも目にした。「日米開

戦」論的な「帝国主義」論や「10・21の勝利と11・7の敗

北」なる文章である。この文章の構成・方程式・起承転結

とあまりにも酷似しているではないか。

大谷美芳・元赤軍派の文章。実に面白い文章である。ふたたび、3たびこの指と

まれ程度の文章。それ故に、「昨日のマルクス・レーニン主義」「昨日のマルクス・レーニン主義」「今日のマルクス・レーニン主義」と言っているのだ。

「時系列的に一読」を。編者 共産主義者同盟赤軍派・「世界革命戦争への飛翔」

発行日 1971年3月31日

発行所 朝日新書

著者 塩見孝也・「赤軍派始末記」元議長が語る40年

発行日 2003年3月31日

発行所 朝日新書

著者 荒 岱介・「破天荒な人々」叛乱時代の証言

発行日 2005年10月15日

発行所 朝日新書

著者 荒 岱介・「新左翼とは何だったのか」

発行日 2008年1月30日

発行所 朝日新書

著者 中島 修・「40年の真実」日石・土田爆弾事件

ア左翼と何か」(旭凡太郎もシニア左翼の1人として登場)

発行日 2016年3月30日

発行所 朝日新書

補章B・大谷美芳・元赤軍派批判

大谷君の「マルクス・レーニン主義」に至る経過

勿論当時は、「赫旗」というセクトがあった。そのことからすれば、言語・用語規定

(概念規定と言おうほどはない)は、それぞれ(数人の間で)

に統一されていったであろうことは十分に想像できる。

「小ブル急進主義対現代左翼」で、大谷美芳論文では「小ブル急進主義対マルクス・レーニン主義」と。

しかし、この「現代左翼」なる自己規定は、「新左翼」なる呼称へのアンチでもあった。「あつた」とは、198

4〜5年に私が確認した人間の言辭である。そして今度は「マルクス・レーニン主義者」と自己規定しようと言ふことか。

大谷美芳・元赤軍派さんは、元『赫旗』に所属していたのではなかったですか。大谷美芳・元赤軍派さんは、元赤軍派と言うことは当うに6

5才はすぎているであろう。あるいは70才もこえているで

あろう。と言ふことは、元は赤軍派でもその後、この40年間、何処で何をしていたのですかね。これまでの論文の目録ぐらゐは銘事して欲しいものである。

ところで、日本独占資本主義でも帝国主義でも結構だが、沖繩のオの字も、アイヌ

のオの字も無くまして、農業・農民問題はマルクスのヤツツケ仕事であつた「共産

党宣言」程度・レベルの無内容である。日本資本主義の原

蓄過程はもとより、現在もなおアイヌモシリ、を略奪しつ

づけその先住民族としての先住権を認めていない。今なお

「北方諸島」や「北方領土」とぬかす。沖繩は現に今も植

民地としてその領海領土、人間をも縛りつづけている。

帝国主義とは疑いもなく植民地・民族問題である。この

植民地民族問題に何一つ答えようとなさなければ、政治

的にも応えていない、この大谷美芳論文とは何か。単なる

資本主義の発展発展論か。資本主義が発達すれば、プロレ

タリア独裁＝一国社会主義は可能だと。「世界革命論」は小ブル主義、今度は「一国社会主義論」で「マルクス・レーニン主義」だと。しかも、7回大会大分裂は、正しかったと。つまり、今もって何一つ反省

していない。アイヌも、沖繩も無視、農民は半プロレタリアで農業は

なくでも工業プロレタリアで充分、プロレタリアで独裁＝

一国社会主義は可能だと!! まあ、なんと粗っぽい社会主義だこと。コワイ・コワ

イ、このような「マルクス・レーニン主義者」には近ずき

たくない。一党独裁社会と国家の区別

もなく、まして「衣食住」は考慮の他であると。人間の顔

が見えない。プロレタリアってどんな顔をしているの、農

漁林畜産はもともこの大谷美芳論文からはじかれて

いるから顔などあるはずもなからうことも想像できる。

大谷美芳・元赤軍派さんは「コレコノヨウに日本資本主義は発達・発展してきたよ!」と。日本資本主義を美

化しているはけである。一昨年の「マルクス・レーニン主義はウソ」、昨日の「マルクス・レーニン主義は誤り」、

そして今日の「マルクス・レーニン主義こそ正しい!」と。

レーニンは、幸徳秋水ほどの『帝国主義論』を展開できなかった。それ故、レーニンは自らの帝国主義論を被弾圧によって奴隷の言葉で書かざるを得なかったと。つまり、レーニンは、ヒルファデング

の『金融論』の焼き直しにすぎなかった。否、ヒルファデングの『金融論』信用論以下である。

レーニンは恥を知っていた。しかし、この大谷美芳なる人物は恥を恥じることを知らぬらしい。レーニンの更なる恥のうわめりを×君、△

君、そして大谷君は繰り返しているのみである。

「人は変りうる」とは考え方が変るということ、大谷君は、「世界革命は誤り」「小ブル急進主義は誤り」と。逸

体、この論文の前までは何処で何を主張し、どのような行動を組織していたのかね。つまり、「人は変りうる」とは、

「人は主義主張があろうがなからうが?」。次から次へと

論点をづらしたり、主張を乗り移ることはできるといふこと。このことをカール・マル

クスは「人は変りうる」と言っている。ところが、人の性格は変りようがなからう。

「世界」はダメで「一国」ならよし。レーニンの軍事革命はよし、プロレタリアから、

これもナンダカナー!。農民を何万人も赤軍をもつて殺したの誰れか。農民から

種初みまで奪ったのは誰れか。

大谷美芳君、中央集権は良いことだと。中央集権の中

味、その実体は知っているの

かね。さて、吾・ブント内中央集権主義について、以下のよう

「中央集権」について「中央集権」とは排他主義をも意味する。イタリアのファシズム、ドイツのナチズム、日本の天皇主義を見よ。

そして、それはレーニンがそうであったように、一党独裁・国家主義をもたらず。ロシアの外延化としてのソビエト同盟。

「排除の論理」とは何か 論争や多数決ではなく闘撃

ちと不意撃ちで排除してきた。1967年の2月7日、佐藤秋雄を拉致監禁・暴行に始まって、1968年の望月彰、岩田弘、そして、1968年3月の第7回大会初日の壇上かけ上り書記長発言をふうじと引きずり倒し。この根

からの敗北主義、敗け犬根性、は遂に1969年7月6日未明の重大事件を引き起す。いわゆる「7・6事件」だ。

これで、主流派だ、主導権を取った、だと言っているのか。論争する内容も、気力もない。多数派を形成しうる政治力組織力もない。それでいて、主流派や主導権は発揮でき

不意撃ち、闘撃ちとなるのである。少数人数で多数の人数をヤツケルゲリラ戦争。古代から用いられる軍法である。ガキのケンカ以下。正面から

背後からオソウこととなる。つまり、軍事力、暴力で勝つたとしても、精神力(論理)では、たたかう前に完全に敗北している。これこそが赤軍派である。

これこそが、1967年2月7日から1969年7月6日未明までつづく「主流派・主導権」なる内実である。敗北を敗北と認識も自覚もできない。

常に、一生負い目をもつ以外にその反省はないのだ。

◎分裂主義者としての日和見・党建設は可能か

私は、これまで(1970年初頭)一向健の日和見主義体質(1965年6月と1967年2月13日2度の関東からの逃亡・箱根越え)を批判してきた。

この1970年代初頭の論文集は『ブント』・西南社気付1980年9月に出版した。

また、2010年9月以降は、旭凡太郎こと藤本昌昭の個人主義・政治主義批判を展開してきた。

さらに、この『プロレタリア通信』68号において、大谷美芳・元赤軍派さんを批判する。

この三者(一向・旭・大谷)に共通するのは、自己防衛・自己正当化を余す所なく自己開陳している事である。

それは、「あの時デモをやっておけば……」「あの時のデモの方針は……」「あの時ピン投テキの提案……」の類いの話である。この類いの話し、戦術というより、単なる技術論である。

第二に、これこそ彼ら、3者の政治内容を成す所の共通項。それが7回大会を大分裂・第二次ブントの互解の始

りとは決して把えないということにある。文字の使い方においても共通している。同一である。それは、「関西派が主導権を取った」旭凡太郎的には「第二次ブントとは7回大会から」とウソブイではばからない。

つまり、「関西派が主導権や主流派」になれば良し。では一体関西派とは誰れのことか。関西派以外は暴力によっても排除することか。

この一点で何のクモリもなく三者(一向・旭・大谷)は同一である。

で、彼らは、何んのタメライもなく、「党」建設を唱和する。そこでは、一向健によ

る「党」なのか、旭凡太郎による「党」なのか、はたまた大谷美芳による「党」なのか。大谷は、「ブントNET」らしい。これが大谷美芳の「党」か。「NETブント」らしい。大谷美芳さん、ブントとは何語ですか、ブントとは何を意味するのですか。

とまれ、いづれにしろ、「非マルクス主義戦線派」、いわゆる「非マル戦派」ということでは、私も3者プラスアルファか。私は、そもそも共産主義者であり、共産主義者同盟(ブントM・L派)であった。

私は、6回大会派でも7回大会派でも8回大会派(1968年12月)・9回大会派(1969年8月)でもない。私は共産主義者として共産主義運動を担ってきた(1964年以降)。そして、それは、一個の盟約として共産主義者同盟を自ら選んで今日に至っているのである。すべ

からく、常に、私は、自らの未来を自ら決定してきた以上のことではない。だが、とは言え、1966年9月段階で南部地区委員会に所属し、「赤軍」を発行し、ポイボルグを運達し、ついには「鉄の戦線」を発行するに及んで、「経済主義」「労働者主義」そして、1969年秋には、「さらぎ派だ」などどレッ

テルやら批難を1人あびてきた。だが、私はヒルムことな

動していた。東京南部地区委員会は大田区内を中心とするものである。

私は、すでに他人を批判する以上の批判や批難を受けたきたし受けつづけている。「社文(社会文化会館)で望月さんの拉致を指示したのは羽山さんでしょう!」はつい

最近のことである。高見圭司などは、いくら違うと言っても今もって信用しない。それもよし、である。そのような批難や批判、誤解を気にするより、人々と交わること人々と共に過すこと、人々に寄り添うことの方がよほど重要重大な政治的関心事である。

私は、「ブント」の内ゲバの歴史から自由であり得ない。私は他人に手を上げたことにはないにしても、私をなくりたい人は山ほどいるであろう事において、自由ではあり得ないのである。

1967年までの共産主義運動とその忘備録的年表

私は、第二次共産主義者同盟結成大会たる、再建第6回大会時にはすでに共産主義者として共産主義運動を展開していた。

1965年6月日韓条約国会批准阻止斗争で被逮捕・起訴処分保留での出獄後、東京南部地区委員会に所属して活

したがって、大小零細まで組織・未組織を含む工場労働者街と学園・住宅を主とする町とよって構成される地区地域である。このような地区・地域で片山さとしさん(社革新)を囲む学習会やら、太田行動委員会(社青同)の人々と前中製作所(全金)労働争議や糞谷のいわゆる「全金銀座」での早朝の(午前7時から7時50分頃まで)チラシ配布などなど。更に、週1回は必ず細胞会議やら「資本論」研究会など。このような学習会や会議にさらぎ徳二がたまに出席することもあった。

南部地区内の大学内で活動拠点をもたない学生、たとえば武蔵工業大学のような学生、こうした学生も居住地、その地区ということで数多くの学生も参加していた。また、私が夜間出身ということ

た、私が夜間出身ということ

で各大学のII部出身の友人・知人との交流も深めていた。以上ですでおわかりと思うが、1966年9月ブント再建大会たる第6回大会前に、多くの潮流・他党派・セクトと同席する機会を数多く設けて活動していた。

このような活動は、1995年「農民連合・東京」結成のおり、副代表をおねがいがした樋口篤三に「オマエも片山先生の勉強会にきていたのか」とおどろかされた。これは、一つのエピソードである。

1965年の2月から1966年の6月まで、いわゆる独立社学同の味岡、同じく独立社学同の古賀・斉藤、そして、明くる年、1966年には、関西ブントと連合統一したのである。こうして、「非マルクス主義戦線派」は、よう連合統一を成し、9月のいわゆる「ブントの大連合」「マルクス主義戦線派」との大連合は成就したのである。

つまり、第二ブント結成とは第一次ブント以上にその結成時は雑多であったと言うこと。元元違う者同志が承知の上で「連合・統一」したのである。

大谷美芳・元赤軍派 マル戦に敗けて悔しい。だいたい、そもそも、大谷君、

君は、「敗ける」という内容をもっていたのか。「勝つ」とか「敗ける」とかは、内容あつてのことである。その当初から無内容では「勝つ」とか「敗ける」の以前の話しである。

そのような意味で私は、1966年9月には、すでに共産主義者として共産主義運動を展開していた、と言ったのである。それ故、「構改」「構改」と〇〇にしていた関西派との「連合・統一」にも同意したのである。

主義者とは何か、運動とは何か、について私は私の考えをすでに行動に示してきているからである。それは1962年〜3年にかけての「夜学連」結成・デッチ上からそうである。

太田地区反戦も太田行動委員会が革共同中核派書記長と言われていた野島三郎とも一緒にやっていた。へ港地区反戦の中核は吉岡であった。つまり、私にとって人々の広がり、深まる団結以外に念頭にない。これは現在も同じである。それ故に、独立派だろうが日和見の構改派だろうが岩田弘の世界資本主義論だろうが、いま、現に帝国主義権力を前にして団結を最優先すべしというのが私の考えである。

「岩田弘の世界資本主義論

に敗けて悔しい。悔しい。ブナグツテしまえ！」頭で敗けたからウシロからブナグ（闇打ち・不意撃ちの事）。このような事を決して勇ましいとは言わない。ヒキョウ者〇〇の風上にもおけない！とはこのことである。

この程度のこととも理解できない。無知で一国革命だ！一国社会主義だ、プロ独II社会主義だ！と。無知ほどおそろしいことはない！7回大会を全く反省していない。反省どころか自慢話にさえしている。私はこうした分裂主義者を断じて許さない！へと言つてもそれは紙の上である。

反省がないということとは、進歩がないと言うこと。私にとって進歩とは、連帯・団結のことだ。

大谷美芳年表との対比で
1965年6月 日韓斗争敗北
「6・15斗争」で被逮捕後
南部地区勝手に専従となる。
1966年9月 第二次ブント再建 6回大会 ※
1966年12月 再建全学連大会
1967年2月2日 明大斗争終結
1967年2月7日 花園紀男他2名によつて佐藤拉致される
1967年2月13日

塩見孝也の箱根越え
1967年8月6日 広島反戦斗争・太田地区反戦青年委として参加
1967年10月8日 第1羽田斗争 佐藤栄作ベトナム訪問阻止斗争
1967年11月 共産主義者同盟南部地区委員会『赤軍』No.1号発行 第2次羽田斗争
1968年11月12日 佐藤栄作北米訪問阻止斗争
1968年1月 南部地区委員会、『赤軍』No.2号発行
1968年1月 佐世保エンタープライズ現地斗争・首都中央斗争
1968年2月 望月彰 社会党本部・社会文化会館より拉致監禁事件
1968年2月 岩田弘 自宅襲撃
1968年3月 ブント第7回大会 大会壇上で書記長・水沢史郎に暴行、水沢史郎他 大会2日目欠席
1968年6月 アスパック
1968年8・3 国際反戦集会
1968年10・21 ブントは防衛庁斗争。他セクトは新宿駅頭斗争
1968年11月 日大斗争
1968年12月 ※

ブント第8回大会へ1968年は、3月と12月の2回同盟大会
1969年1月 東大安田講堂中心に斗争
1969年 「4・28斗争 破防法適用

1969年 「7・6事件」
1969年8月 ※ブント第9回大会
1971年12月 倉田豊寛を日向派「戦旗」R Gが闇撃

1968年2月 望月彰 社会党本部・社会文化会館より拉致監禁事件
1968年2月 岩田弘 自宅襲撃
1968年3月 ブント第7回大会 大会壇上で書記長・水沢史郎に暴行、水沢史郎他 大会2日目欠席
1968年6月 アスパック
1968年8・3 国際反戦集会
1968年10・21 ブントは防衛庁斗争。他セクトは新宿駅頭斗争
1968年11月 日大斗争
1968年12月 ※

1968年2月 望月彰 社会党本部・社会文化会館より拉致監禁事件
1968年2月 岩田弘 自宅襲撃
1968年3月 ブント第7回大会 大会壇上で書記長・水沢史郎に暴行、水沢史郎他 大会2日目欠席
1968年6月 アスパック
1968年8・3 国際反戦集会
1968年10・21 ブントは防衛庁斗争。他セクトは新宿駅頭斗争
1968年11月 日大斗争
1968年12月 ※

1968年2月 望月彰 社会党本部・社会文化会館より拉致監禁事件
1968年2月 岩田弘 自宅襲撃
1968年3月 ブント第7回大会 大会壇上で書記長・水沢史郎に暴行、水沢史郎他 大会2日目欠席
1968年6月 アスパック
1968年8・3 国際反戦集会
1968年10・21 ブントは防衛庁斗争。他セクトは新宿駅頭斗争
1968年11月 日大斗争
1968年12月 ※

三里塚 1.15 東峰現地行動

- 日時：2017年1月15日（日）午後3時
- 場所：旧東峰共同出荷場跡（千葉県成田市東峰65-1）
／集会後、開拓道路に向けてデモ

●会場への行き方

- ①2017反対同盟旗開き終了後（午後2時頃）→旧東峰共同出荷場に車移動
- ②京成東成田駅地上 14時00分 迎いの車待機／12：35発 京成上野特急→13：41着 成田→13：52発 京成成田→乗り換え京成本線（普通）[芝山千代田行き]→13：57着 東成田

●主催：三里塚空港に反対する連絡会

連絡先：千葉県山武郡芝山町香山新田90-5／電話：FAX0479-78-8101

1969年
1969年8月
1971年12月
倉田豊寛を日向派「戦旗」R Gが闇撃